ドラマ『坂の上の雲』に元気をもらって

21 期　十川　幸夫

はじめに

こんにちは、21 期の十川（そがわ）です。この度、季刊誌に寄稿を依頼され、ボート部の思い出でも書こうかと思いましたが、今季に同期の道関君が思い出話を書くようなので、お任せします。ただ、ひとつだけボート部を続けて良かったことを言うと、かわいい？後輩に恵まれたことですね。今でもたまに集まって、昔話や近況の世間話に花を咲かせ、楽しい時間を過ごしています。

かわいい？後輩に囲まれて（本人：前列左から 2 番目）

さて、本寄稿にあたっては、せっかくの機会ですので簡単な自己紹介と、私の大好きなドラマ『坂の上の雲』について書きたいと思います。このドラマを観て、自身どんなに元気をもらったことか。特にこれから社会に出る現役の皆さん、また仕事などで悩んでいる方がおられましたら、是非ともご覧ください。皆さんの人生に、少しでも参考となれば幸いです。

1.　これまでの人生（自己紹介）

生まれは山口県柳井市の海沿いの村落で、目の前には島々が連なる穏やかな瀬戸内海が広がっています。よって、小さな頃の遊び場は海、海、海。潮が引けば貝、タコ、カニなどを獲り、潮が満ちれば魚釣り、そして海の幸を家族で味わう。中学、高校時代もサザエ、アワビを獲りに素潜りで海中へ。そして、大学ではボート部で水上競技。余談ですが、昔やってたパチンコも『海物語』、本当に「海、だ～い好き！」です。

ということで、就職は海上自衛隊（以下「海自」）に入隊しました。入隊の動機はいろいろありますが、「海に携わる仕事に就いて、休日は海で楽しみたい！」、これが一番です。入隊後は広島県江田島にある幹部候補生学校で厳しい訓練に耐え、無事に卒業、幹部に任官できました。これもボート部で培った気力・体力のおかげです。

海自での職種は航空機の整備に関わる後方支援分野で、航空部隊の隊長、術科学校の教官、製造工場の駐在検査官、新機種の研究・開発などに携わってきました。「海自なのに航空機？」とよく聞かれますが、海自には主に海上を哨戒（パトロール）し、潜水艦を捜索・攻撃する飛行機やヘリコプターがあります。ボート部の先輩であり、海自の上官でもありました 19 期の棚岡さんは艦艇要員（護衛艦乗り組み）ですが、その護衛艦にヘリコプターが搭載されています。海自のことについては、季刊誌（No.2 2022 年春号）に棚岡さんが詳しく執筆されておりますので、ここでは省略させていただきます。棚岡先輩、いつもお世話になります。

平成 30 年に約 32 年間の海自勤務を終え、55 歳で定年退職となりました。海自在勤中は仕事に追

われる毎日でしたが、転々とする勤務先では八戸のヤリイカ、相模湾のアマダイ、明石のマダコなど、地方の旬な釣りを楽しめたので、所期の目的は達成できたと思います。

現在は、ある銀行の職員寮の管理人をやっています。仕事内容は寮施設の管理や寮生のお世話で、管理人二人で 3 日毎のシフトで宿直勤務をしています。よって、休日は土日固定ではなく平日が多いので、土日混み合う釣り場にも行きやすくなりました。というか、これが今の仕事を選んだ大きな理由です。自宅は千葉県柏市にあり、娘は独り立ちしたので、妻とメルちゃん（チワワ♀）と暮らしています。海自の勤務地や娘の学校の関係で、自宅は海から遠い場所となってしまいましたが、休日に海のコンディションが良ければ、房総半島（館山方面）や鹿島灘へ片道 3～4 時間かけて車を走らせ、楽しく釣りをして過ごしています。

2. ドラマ『坂の上の雲』

では、本題に入ります。ジブリのアニメ映画『崖の上のポニョ』も好きですが、ここではドラマ『坂の上の雲』について書いていきます。このドラマは、平成 21 年から 23 年の年末に、全 13 回を 3 部構成で 3 年にわたってテレビ放送された、NHK 制作のスペシャルドラマです。原作は司馬遼太郎の同名小説です。司馬が 10 年の歳月をかけ、明治という時代に立ち向かった伊予松山出身の秋山好古（よしふる）・真之（さねゆき）兄弟と正岡子規の青春群像を、渾身の力で書き上げた壮大な物語で、文春文庫全 8 巻という長編歴史小説です。

先に白状しますが、恥ずかしながら私は原作を読破できていません。文庫本の小さな文字を追うのが苦手で、読書という習慣が全くありません。唯一読んだ文庫本は、大学の文学の読後感の課題でやむなく読んだ短編小説だったと記憶しています。原作『坂の上の雲』は、海自入隊後に“海自幹部必読の書”みたいに上官、同僚などによく薦められましたが、全く読まず。平成 21 年にこのドラマの第 1 部を観終え、その先のストーリーが知りたくて文春文庫の第 1 巻から読み始めたのですが、第 3 巻の途中で平成 22 年放送の第 2 部に追い抜かれ、そこでお終いです。よって、これから書く内容は、ドラマを観て感じたことが中心となります。既に原作を読破された方々、原作を読破なくして『坂の上の雲』を語ること、ご容赦くださいませ。

ドラマの制作にあたっては、「本作を映像化させてほしい」とのオファーが映画会社等から殺到していましたが、「戦争賛美と誤解される、作品のスケールが描ききれない」として、司馬は許可しませんでした。司馬の死後、NHK の「総力を挙げて取り組みたい」との熱意により、司馬遼太郎記念財団や夫人の承諾を得て、ようやく制作された経緯があります。NHK さん、本当に感謝です。

なお、ドラマの視聴については、NHK オンデマンドの「まるごと見放題パック：990 円（税込み）」がお勧めかと思います。残念ながら NHK での再放送は当面予定がなく、NHK 制作の DVD（全 13 巻）はありますがかなりお高いので。他に DVD レンタルという手もありますね。

3.　この物語は、

(1) ナレーション

【まことに小さな国が、開化期を迎えようとしている。】ドラマの冒頭、俳優・渡辺謙の心に響く声で朗読（ナレーション）が始まります。小さな国“日本”の明治維新後の時代背景やこの物語の概要が語られ、自然とドラマに引き込まれていきます。この朗読はとても好きで、分かりやすく印象的なので、以後【　】で囲んで多く引用することとします。

【（中略）**この物語は、その小さな国がヨーロッパにおける最も古い大国のひとつロシアと対決し、どのように振る舞ったかという物語である。】**明治維新を成功させて近代国家として歩み出し、日露戦争勝利に至るまでの勃興期の日本を描いています。軍人である秋山好古・真之兄弟の生きざまを中心に描いているため、戦争が背景となり、悲惨な突撃シーンや勝利して万歳するシーンがあり、軍国主義をイメージするかもしれません。司馬遼太郎が「戦争賛美と誤解される」と危惧したのは、そういったところでしょう。しかし、そうではありません。

【（中略）**彼らは、明治という時代人の体質で、前をのみ見つめながら歩く。のぼってゆく坂の上の青い天に、もし一朶（いちだ）の白い雲が輝いているとすれば、それのみを見つめて、坂をのぼってゆくであろう。】**彼らとは、秋山好古・真之兄弟と正岡子規の三人であり、時代の渦中で悩み苦しみつつも、ひたむきに前進しようとする姿に魅了されます。その気概と志に心が震えてしまいます。この物語は戦争賛美ではなく、この三人の青春群像を通じて、近代国家誕生にかけた人々の姿が描かれています。

(2) 秋山真之という人物

【秋山真之は、日露戦争が起こるにあたって、勝利は不可能に近いといわれたバルチック艦隊を滅ぼすに至る作戦を立て、これを実施した。】真之は、連合艦隊司令長官・東郷平八郎の下で作戦参謀として旗艦「三笠」に乗艦する。東郷は「智謀湧くがごとし」と真之の作戦立案能力を高く評価し、その作戦をことごとく実施した。日本海海戦においては、“東郷ターン”と呼ばれる大胆な敵前での左回頭（取舵）を行い、敵艦隊の進路を遮って先頭艦に集中攻撃する“丁字戦法”などにより、バルチック艦隊に壊滅的な打撃を与え勝利を収めた。

真之は、幼少期の友人の正岡子規と共に文学の道を志して大学予備門に入るが、経済的な理由で中退し、兄好古の勧めもあって海軍軍人となる。海軍ではアメリカ留学で学んだ海軍戦術の研究に没頭し、数々の作戦を編み出してきた。その没頭ぶりは、作戦を練り始めると入浴せずに数日過ごしたり、奇妙な行動をとったりと、周りからは変人呼ばわりもされていた。周りを気にせず、“お国のため”と自分の信じるところを突き進み、日本の海軍戦術の基礎を築いた。

真之役:本木雅弘　新進気鋭で向こう気の強い真之を熱演

真之が起草した日本海海戦出撃時の電文の一節である「本日天気晴朗ナレドモ波高シ」は、今でも短い文章で多くのことを的確に伝えた名文として高く評価されている。また、海戦後の「連合艦隊解散の訓示」も真之が起草する等、後に“秋山文学”とも呼ばれる海軍の規範ともなる名文を多く残している。七、八歳の頃、雪の朝、便所に行くのが面倒で北窓から放尿した際に歌を詠んだ。「雪の日に　北の窓開け　シシすれば　あまりの寒さに　ちんこちぢまる」父親が感心するほど、幼少期から文才があったようである？　軍人になる前に志した文学への想いを、違う形で夢叶えたと思います。

(3) 秋山好古という人物

【その兄の秋山好古は、日本の騎兵を育成し、史上最強の騎兵といわれたコサック師団を破るという奇蹟を遂げた。】好古は、陸軍軍人としてフランスに留学して騎兵の戦術を学び、日本の騎兵を育成し、「日本騎兵の父」と称された。日露戦争では部隊指揮官として、騎兵部隊に歩兵、砲兵、工兵などを随伴させる新たな部隊“秋山支隊”を編成し、コサック騎兵に対抗した。日露戦争最後の戦いとなった奉天の会戦では、騎兵の機動力を活かして敵の後方に展開・攪乱し、ロシア軍退却の一因となった。

好古は、多くの名言を残している。「身辺は、単純明快でいい」「男子は生涯一事をなせば足る」「いかにすれば勝つかということを考えてゆく。その一点だけを考えるのが俺の人生だ。(後略)」軍人となった好古は、騎兵研究に没頭し、自分の勉強が一日遅れれば、この国の成長が一日遅れると考え、日々研究に励んだ。騎兵の育成を人生の目的とし、人生を“単純明快”であろうとした。あえて人生を単純なものにして、「騎兵を用いて勝利する」それのみを見つめて、坂をのぼっていったのであろう。

好古役：阿部寛　アベちゃんの豪放磊落さは好古そのもの

大の酒好きでも有名であった。食事代わりに酒を飲み、戦場でも水筒に酒を入れて持ち歩く。それでいて、戦場では窮地に動揺する部下の士気を高め、冷静かつ的確な判断力をもって部隊を動かし、見事に作戦を完遂する。度量が大きく快活で、小さなことにこだわらない“豪放磊落”（ごうほうらいらく）な姿は、小心者の私にとって「ああ、自分もこうありたい！」と憧れるばかりです。

(4) 正岡子規という人物

【もうひとりは、俳句、短歌といった日本の古い短詩型に新風を入れてその中興の祖となった、俳人・正岡子規である。】子規は、従来の伝統的な俳句の理屈を排し、自然や物事を実際に見たままに描写する“写生”の重要性を悟り、俳句や短歌に新たな詩情を開拓する等、後続の文学に計り知れない影響を与えた。俳誌『ホトトギス』を中心に俳句活動を行い、後進の指導に力を入れ、この活動により著名な俳人、詩人を輩出している。

子規は、日本新聞社に入社し、日清戦争では記者として従軍したが、その帰国途中に大喀血し、当時は不治の病とされた肺結核を悪化させる。晩年は脊椎カリエス（結核性脊椎炎）となり、34 歳という短い生涯を終えるまで、ほとんど病床に臥す身となった。その甚だしい痛苦の中にあっても、子規は不屈の精神をもって多くの作品を生み続けた。俳句革命に命をかけた子規、その気概に驚嘆する。

子規役：香川照之　17Kg 減量し、
迫真の演技で病に臥す子規に迫る

「柿くへば　鐘が鳴るなり　法隆寺」生涯に 20 万を超える句を詠んだ子規の作品のうち、最も有名な句である。ドラマでは、日本の情景をバックに、子規の句が時折詠まれる。なんとも情緒あふれる、心にしみる情景であろう。美しい日本、その伝統と文化、そして昔から変わらぬ日本人の心をこれからも大切にし、後世に受け継いでいかなければと思う。

4.　主題歌『Stand Alone』

原作のタイトル『坂の上の雲』とは、坂の上の天に輝く一朶の雲を目指して、一心に歩むが如き当時の時代的高揚感を表したものです。そのイメージそのままに作り出されたドラマの主題歌が『Stand Alone』です。3 年にわたった各部のエンディングに、毎年異なる三人の歌手（サラ・ブライトマン、森麻季、麻衣）の優しい歌声が響きます。その情景には、高い山に続く坂道があり、その山の上には幻想的な光輝く雲が広がっています。

この曲は、近代化を遂げた明治時代の日本（主に軍人）が、“凛として”立つ様を表現した意味合いがあります。混迷期の日本に希望を与える楽曲として、東日本大震災の復興を支援する曲として歌われたり、卒業ソングとしても親しまれています。

包み込まれるような音色と歌声で、聴くたびに自分の歩んだ道が目に浮かび、迷い悩んだ日々が思い出され、自然と涙が溢れてきます。これからも夢と希望を持ち、胸を張って人生を歩んでゆこうという気持ちになります。これは、YouTube にいくつか配信されているので、是非とも聴いてみてください。

5.　「一朶の雲」に想う

「一朶（いちだ）」とは、「ひとかたまり」を意味しています。原作や主題歌にある「一朶の雲」は夢や高い目標を示していますが、それを雲に例えたのには深い意味があるのだと思います。子供の頃、海で釣りをしながら、青い空に流れてゆく一朶の雲をゆっくり眺めていたような気がします。動物や人の顔に見えたり、時にはゴジラが出現したり、飽きることはありませんでした。雲の形は変わりゆくものであり、人それぞれに見え方も違う。目標とするものも人それぞれであり、その目標も日々変わりゆくものなのでしょう。

ドラマ『坂の上の雲』が放送された頃、私は海自在勤中の 40 代後半で、世間一般でいう中間管理職のストレスを抱え、悶々とする日々を送っていました。仕事のやりがいも失いつつあり、何をするにもおっくうでやる気が出ず、精神的にも追い込まれていたように思います。そのような時期に、このドラマに出会いました。秋山好古・真之兄弟や正岡子規が、青い天に輝く一朶の雲を見つめて、苦悩しながらも懸命に坂をのぼってゆき、事を成し遂げる姿に感動しました。そして、自分も「また明日から、一生懸命がんばろう！」と幾度となく元気をもらって、辛いときも乗り越えることができたと思います。

やはり、人生には夢や目標が必要なのでしょう。それが見えていれば坂をのぼりきり、その達成感に喜びを感じることができる。それが見えていなければ、探せばよい。諦めることなく、夢や目標を探していくことも、楽しい人生だと思います。仕事や私生活などで行き詰まりを感じた時、青い空に流れてゆく一朶の雲をゆっくり眺めていると、何かが見えてくるやも知れません。

おわりに

今年は理工ボート部創立 60 周年ですが、私も 60 歳（還暦）となります。今は“一杯の大きなイカ”を追って、釣りバカ人生を突き進むばかりではありますが、今一度、何か目標を見つけたいと思います。子供の頃と同じように、海で釣りをしながら、青い空に流れてゆく一朶の雲をゆっくり眺め、これからの人生を考えてゆきたいと思います。

皆さんの益々のご活躍と、幸せな人生を歩まれることをお祈りいたします。

館山の釣り場にて

出典： 1）NHK スペシャルドラマ『坂の上の雲』
2）司馬遼太郎『坂の上の雲』文春文庫